

【フリートーキング】

司会「本日のプログラムの基調講演、活動報告に関しましてのご質問、ご意見、その他今日のフォーラムの在り方などお気づきの点があればご意見を頂戴したいと存じます。ぜひたくさんのご質問やご意見をお待ちいたしております。

ご質問やご意見ございます方は、あ、さっそく有難うございます。スタッフがマイクを今お持ちしておりますので、それではお願いいたします。」

坂井「春日市奴国の丘歴史資料館のボランティア 坂井と申します。質問でございます。行橋屋根のない博物館、森会長のお話に変な励まされました。というのも私どももコロナ禍で、ガイドボランティアですが、存続の危機にあると今考えております。というのもボランティアの方々とそれから特に小学生、そして全国からいらっしゃるツーリズムの方々へのガイドが全くできない状況になっております。特にあの緊急事態宣言後も、ボランティアの方はご高齢の方が多く職員対応ということにいたしました。それで全然できない状況が続いています。そこで二つほど質問させていただければと思うんですが、一つは今後ガイドボランティア、ガイドということで継続をされるのか、それとも新しいボランティアの在り方を考えられるのか。それから二つ目は、15年の歩みを振り返ってこれは大変素晴らしいなと思いました。その打ち合わせや作業は具体的にどのようになさったのか。集まってなされたのか、それともいわゆるオンライン等でなされたのか。以上でございます。本当にありがとうございます。」

司会「はい、それでは森会長からご回答いただけるのでしょうか、マイクをお持ちいたします。よろしくをお願いします。」

森「行橋の私たちのボランティアについての質問がありました。現在私たちは、歴史ガイドボランティアをやっていますが、今、人数は27名おります。史跡あるいは、歴史資料館の中のいろんな展示作業、それから古墳等の環境整備、そういったところまで範囲を広げております。しかし今回は、コロナになったということでほとんど歴史資料館も閉館でした。それからいろんな設備がすべて閉館ということで出来ないんです。ボランティアのみなさんも、これからいつ私たちの出番があるのだろうか、ということで非常に不安な気持ちが続きました。そこで今事例報告したように、工夫して野外の方に転じていこうと、この2年間は野外を中心とした活動を展開しました。そういったことから、いろんな取り組みについて今後もその活動の基本は変わりませんが、いろんな活動に着手していこうと考えております。そういうことで私たちが今後、ボランティアを続けていく以上は、皆さんと行政などと共同しながら進めていくのがベターじゃないかな、というふうに思っております。

そういうことで報告したところです。

それから文集のことについては、私たちが歩んだ15年を振り返って、平成17年から15年間の令和元年までを3つの班ぐらいに分けて、各々の班が各々の結果を出していく、そして最終的にまとめていくというようなやり方をしました。

私たちが作ったものについては、自分たちが今後15年を振り返った時に、あの時はもう少しこれ位、こういうことをしておけば良かったね、というようなことを皆さんと振り返って確認したところです。編集の要領は非常に難しくボランティアとしては初めて経験しましたので、今回は自分たちの為の勉強になったんじゃないかなという風に思っています」

司会「あと森会長、打合せにつきましてはオンラインなどもご活用されたんでしょうか、というご質問もあったかと思いますが、いかがでしょうか。具体的にお打ち合せはどのような形でなされたでしょうかというご質問もあったと思うので、その辺もご紹介いただければと思います」

森「先ほど3班に分かれたということで、小さな班を3つ作って、私どもには体験学習スペースという部屋があって、定員が22人入れますけども、そこで4~5人ずつ役員を決めて離れ離れになりながら討論して資料を集めてやっていくということで、オンラインはしておりません。以上です。」

司会「あとですね、新しいボランティアさんを受け入れるっていうことはいかがでしょう」

森「私どもも若い人を次々入れていきたいということで、ボランティア養成講座というのを歴史資料館の講座の中に一つ取り入れております。そのボランティア養成講座を7回受けていただくと、市民学芸員さんという資格がとれる、というシステムを作りまして新しい人を入れていきたい、というふうに思って今活動しているところであります。以上です。」

司会「はい、ありがとうございました。いかがでしょうか。」

坂井「ありがとうございます。特にボランティアの活動はさらに多様化して、継続していく。そしてコロナの状況でも工夫をしてやれることをやっていく、私ども春日市も大変励まされて参考にさせていただき、分かち合いたいというふうに思っております。ありがとうございます。」

司会「ご質問、ご回答ありがとうございました。それでは他の方いかたでしょうか。はい、後ろにいらっしゃいます。」

上野「九州国立博物館から参りました上野と申します。初めて参加をさせていただきました。どの発表を聞いても収穫になることばかりで我々もこれからほんとにコロナの開けた後の活動、実は今当館のボランティア活動はすべて休止をしている状態で、これからどういう活動をしていこうかと模索をしているところでしたが、ほんとにいいヒントをいただけたというか、来てよかったな、聞いて良かったな、というふうに思っている次第です。

それぞれに質問させていただきたいんですけども、一つ大澤さんに質問をさせていただ

きたいと思います。ちょっと私の勉強不足で申し訳ないんですが、スライドの中に新型コロナによるボランティアの変化のところだったと思うんですが、オンラインによる可能性の拡大と排除の可能性というところがあったと思います。我々も今、これからどんな活動をしていこうかと考えている中で、どういうオンラインでの可能性、どういう活動が、具体的にあるのかな、とお尋ねします。

それから排除という言葉、これが少し私にとって刺激の強い言葉でして、どういったこれまでの活動が排除されていくのだろうか、今の大澤さんの考えの中で具体的にどういったものがあるのか、ということを少しヒントでも教えて頂きたいと思います。

それから、行橋屋根のない博物館、森会長とそれから最後にお話いただいた土屋さんに、同じ質問をさせていただきますが、私も九州国立博物館の職員としてボランティア担当でボランティアさんと関わっている中で、いわば行政の側の立場なんです。ボランティアさんと行政の方が話し合う場が、例えば週にどれぐらいとか、月にどれぐらいとか、どれぐらいの頻度で行政とボランティアの方が会議をすとか、そういった場面があるのでしょうか。そこのあたりを少し聞かせていただきたいと思います。すみませんよろしく願います。」

大澤「ありがとうございます。ご質問いただいたのは、私が説明の中で、オンラインによる可能性の拡大と排除の危険性という言葉を使いました。ボランティアの活動だけじゃないんですけども、このコロナ禍で私自身、オンラインを身近に使うようになったと感じています。

可能性の拡大というのはさっきも少し説明しましたように、このオンライン、例えば ZOOM を使うとか、Facebook とか SNS で呼び掛けるという形で動画配信のような形でシンポジウムをやる企画にたいして、現地、対面でやるとなったら、オンラインを前提にしてなければ当然、会場周辺近隣の距離とか、物理的な近さに制約されるわけです。

オンライン、YouTube だったらどこにいても見れる、参加できる、情報を受け取れる、ということがあります。もっというと、自分の紹介の中に糸島芸農という芸術祭の実行委員をやったときに、先ほどの質問ともつながりますが、私たちの実行委員会の打ち合わせは、今回、全てオンラインでした。メンバーは基本的には糸島市内在住で、歩いて行ける距離ではないですけども、僕なんかはその実行委員会、いつもやっている会議のところにはチャリンコでいける距離なんです。打ち合わせに、福岡市内から車で来るメンバーもいますが。

今回はコロナですべて打ち合わせは、オンラインでやったところなんです。このことは仕事が忙しくていけないという人も、「あ、その時間だったら大丈夫だ」ということで参加できるわけですね。割と平日の夜に打ち合わせをやっていましたが、仕事が終わってから福岡市内に在住している人が、車に乗って糸島まで打ち合わせに来るかといったらちょっとしんどいな、という人も大勢いたでしょうが 7 時からだったらいいよ、という形で参加してくれました。

実行委員会の打ち合わせもそういう形、オンラインで、今までだったら近くにいる仲間だけで、3人ぐらいでも今日はやっちゃおうかみたいな形になっていたのが、それでも5人ぐらいですが、集まって情報共有する頻度が高まったり、そこに地理的な制約は取り除かれるという形が一つの可能性としては非常に高かったと思います。

一方で、排除の危険性、排除っていう言葉はほんとうにきついので、言い換えるとしたら「見えなくなる人がいる」ということですね。例えばそれは、僕らはその連絡ツールがFacebookを中心にやっていたんですが、Facebookのアカウントを持ってない人は知らない、単純に知らない。それからFacebookとかでグループに参加している人でも徐々に距離をとる人もいるわけです。同じグループの中にも返信が返ってこない人がいるとか。恐らくそうなる情報は届いてはいるけれども、見ないでスルー、いわゆる既読スルーみたいな形になって、その人たちにこちらからは届けているはずだけれど届いていないということがあるわけです。

だから排除とは言わないけれども、徐々に見えなくなるということです。

もう一つの排除というか、オンラインの難しさは、対面だとそのコミュニケーションの間の感情というのが言葉以外のやりとりから表情で読み取って、なんかこの人意見言いたそうだけと言いつらそうだな、後でちょっと飲みに行こうかな、来なくなったら困るなあ、とか。ボランティアの活動で飲みに行けないとか、食事に行けないことがコミュニケーションの相当大きな障害になっているんじゃないか、と僕は実感していました。

そういう意味では「見えなくなってしまう」こと、言葉以外の情報通信に乗っからない表情とか、コミュニケーション不足などから「見えなくなってしまう」ということの危険性がやっぱりあるなと思いました。以上です。」

司会「はい、いかがでしょうか。」

上野「大変参考になりました。ありがとうございました。」

司会「ありがとうございました。続きましてはボランティア団体の二組にご質問でした。行政の方と会議など話し合う場合は、頻度はいかがでしょうかということでした。週にどれぐらいか月にどれぐらいか教えていただけますか。それでは森会長から先にお願いたします。」

森「私たちはボランティア事務局を歴史資料館の中に設けています。その歴史資料館の館長さん以下職員さんとは、ほとんど一週間に5回以上は会っています。そういう接触をしています。それから歴史資料館に届いたいろんなことについても職員さんや館長を含めて協議をしたり、それからいろんな対策を作ったり、まさに私たちも職員じゃないかなという気がするんですけど、それぐらい行政と今の歴史資料館の職員のみなさんとはコミュニケーションを交わしております。

今度は行橋市の行政ですが、その中に観光課とか文化課とかいろんな課がありますが、その方たちとも、例えばこう発掘しますよとか、あるいは何々をしますよ、展示をしますよ、というときは必ずその担当と話し合いをしています。

私たちがボランティアとして出来るだけ支援をしていきたいということで、行政と直接話すというのは月に何回とか決まっておりますが、そういう頻度で行政ともつながっております。

また将来私が思っているのは、行政の方は、ボランティアの皆さんとやっぱり今言ったとおり共同してそういったものを作り上げていく、それが最も理想じゃないかなと、職員だけであるというのは人数が少ないのでね、ボランティアがそれを出来るだけ加勢していくというような体制を作っていくのが理想じゃないかなと思って、今それに向けてがんばっています。あと館長さんから何かあったら・・・」

宇野「歴史資料館の館長をしております、宇野といいます、どうぞよろしく申し上げます。私も行政は、市民が生き生きと活動できるのをお手助けするのが仕事だと思っています。ですから歴史博物館や歴史資料館は、歴史を皆さんに教える、伝えるだけじゃなくて、市民の皆さんが歴史を学べる、学んでいく、どういう風に学んでいったら楽しいか、そういったものを自ら楽しめるような歴史資料館、歴史博物館にしていきたいなという風に思っています。森会長さんにそういうふうにしていくにはどうしたらいいのかな、ということを常々ご相談しています。

行橋市では、2025年には65歳以上が33.8%になります。もう3人に1人65歳以上になります。これからは、私を含めてお年寄りの時代になるわけですから、お年寄りが生き生きと残りの人生を楽しめるように行政側がお手伝いをしなきゃいけないんじゃないかと思って、そういった活動を深めていきたいなという風に私は思っております。以上です。」

司会「ありがとうございました。それでは土屋代表お願いいたします。」

土屋「いくつもの団体に所属しておりますので、全部申します。

まず吉富町との連携は毎月一回お話をしますので、その報告を兼ねて文庫だより「とんからりん」を届けに行き、どういう内容のお話をしたのか、子供たちの反応はどうだったのか、次はこういう内容でします、というのをお届けします。だから月に最低一回はあります。

図書館には、もう一人の役員がとても読書好きで、しょっちゅう行っています。そこで司書さんとの連絡が取れるし、司書さんを通じて町との連携がとれるというところがあります。

子育て支援センター、それから福祉センターとは「とんからりん」を届けに行ったときに必ず会話をして帰ってきますので、毎月一回は連絡を取っているという状況です。

豊前市の方ですが、豊前語り部の会ですけれども、私がおその窓口として豊前市芸術文化振興協会という所に籍をおいています。そのチームの中に行政から4~5名入っておりますので、求菩提資料館の館長さんもその会員になっていますが、そういう方たちの中で私もこういうことをしたいと思っているが、協力をお願いしますかとか、その行事だったら私たちも手伝いましょうとか、今、市美展があつてますけれども、なんかそういう交流はあります。

それから同じように社会福祉協議会にも私たちは籍をおいていますので、読書ボランティアすべてボランティア保険は、豊前市社会福祉協議会のほうに入っています。コロナ禍で年に1回になっていますけれども、必ずみんなが集まる会議があります。

その際、どんな活動をしているのか、どんなことを困っているのか、ということは吸い上げてくれます。そして私も「とんからりんを語ろう会」をお届けしますので、その時にお話をします。

また、私たちが作ったスクリーンガードをみて、社会福祉協議会の皆さんが自分たちで作ってくれましたが、透明度が足りませんでした。そこで「これ透明度が足りんよー」と言ったら本物を二セット買ってくれました。それを貸し出してもらえるので、私たちは社会福祉協議会からお借りしたものを使っております。

京築教育事務所のほうは年に2回会議がありますので、その時に「こういう活動が出来ました、こういうことを困っています」ということを図書館の情報、街の情報、そんなことなどを全部交流しています。小学生の読書リーダー養成講座っていうのがありますが、ずーっと継続して実施しているところです。

福岡「子どもの読書」関連団体連絡協議会の、京築地区協議会のときは、オンラインは使いませんけども、グループラインを使いました。19名入っていますが、そのグループラインを使って、今コロナが大変ですからこういう風にして下さいとか、気を付けて下さいっていうようなことから、だれかこの中で事務局をしてくれる人いませんかとか、受付をしてくれる人いませんか、駐車場の案内もう1人2人してもらえませんかっていうような情報を流して、だれだれが手伝いましょうっていうようなことが連絡来ます。

その他、役割分担などの資料は全部郵便で送付しました。郵送代がちょっとかかりましたが、細かい資料を送って徹底するというのをしました。

それから県の福岡「子ども読書」関連団体連絡協議会の方では、来年度の20周年記念行事に向けての準備を今、オンラインで取り組んでいます。以上です。」

司会「ありがとうございました。よろしいですか。それでは他にご質問やご意見は、ありませんか」

原田「講演の先生方に教えてもらいたいんですけども、先ほど講演の中で文化芸術が質の高い生活には重要であるとお話がありましたが、私の現状認識としては多くの人はその認識が薄いのかなと思っております。もっと多くの人にわかりやすくその重要性を発信する必要があると思いますが、その為にはどうすればいいのか、意見なりヒントがあれば聞かせてほしいと思います。文化への認識が高まれば私たちのボランティア活動にももっと応募する人が増えないかなと考えておりますので、よろしく願いいたします。」

司会「はい、ありがとうございます。それでは伊佐様の方からお願いできますでしょうか。」

伊佐「はい、ご質問ありがとうございます。非常に難しい質問で(笑)。これ一言で文化と言いましてもいろんな文化がありますね。一部では流行っている若者文化といえますか、

例えば YouTube など見ますと、すごいです。いろいろなのが出てきます。

YouTube だけじゃなくて、最近はやりのインスタグラム、TikTok、私、高校生の子供がいますが、我々が見ている世界と全く違います。我々に対応できない、私は Facebook もしていませんので、ほんとに排除というのも変ですが、疎外というか、してない人とはかかわりがないんですね。だから一つは、そういう方々も何かできるような、どういう発信の仕方があるか、あらゆるメディア、マスだけじゃなくてメディアを扱うべきかなと、さすがに私も YouTube は見ますので、それは一つあると思いますね。

それと、いろんな分野の文化と申しましたが、例えば去年コロナ禍でブームになった「鬼滅の刃」ってありましたね、あれはある意味で日本文化の発信なんです。世界中で受けていますね。だから映画館はかなり救われたという話があります。

同時に、関連書籍、漫画は売れたんですが、一般書籍は落ちているんです。一方で伸びたのは電子書籍ですね。

だからデジタルに対応しているところは、どんどん伸びてくる。デジタルは先ほど話がありましたように距離と時間の制約がないからですね。

簡単に言うと消費者になった場合、自宅でゆっくりと動かずにいろいろなものが手に入ってしまう。それに対応できていないところは、声が届かないんですね。だからある意味で排除になる可能性があるということですが、皆さん方が重要だと思っている文化活動というのがそこで排除されてしまっている可能性があります。

そうすると一つの方策としては、所謂ユーチューバーとかインフルエンサーと言われるんですけども、その人が一言これは面白いといったら皆ワーツと飛びつく人がいるんです。そういう人達、特に若い人たちがうまく、どう連携をとるかです。

一方で、いったい誰がインフルエンサー、誰がユーチューバーで流行っている人なのかかわからないので、そこは例えばエンターテインメント扱っているそういう専門の人々に、例えば行政がアプローチしてもいいのではないですかね。

最近ビックリしたんですが、農林水産省でユーチューバーみたいなことやっていて、今かなりバズってます、相当流行っているんです。ああいうお堅い国家公務員の人たちが、気軽にユーチューバーで出てくるんです。時代は変わったなって、それこそ先週末見たばかりで目から鱗というか、大学教授の私もそういうことしなきゃいけないのかな、と思ったり、そういう情報の発信もあるんだな、と思いました。

彼らがやっているユーチューバー、最初の内は全然流行っていなかったらしいですけど、先ほどいったインフルエンサーが一言、農林水産省のそれが面白いって言ったら、ワーツと一気にフォロワーがついて広がったらしいんです。

それともう一つ巣ごもり需要って私申しましたけれども、そここのところが盛り上がっているという話でした。それと関連すると思ったのが、大澤さんの講演の中で 20 代がボランティア活動していない理由がわからない、という話がありました。

それは、たぶん 20 代は巣ごもりに十分対応しているのでは、と思いました。

学生を見ていると、人手不足の場面で宅配のバイト潰けていうか、バイトが沢山あっても、もっと欲しいという場面もあれば、それこそ飲食店なんか今バイトを雇えないから家で遊んでますとかもあります。授業もオンラインになったりすると、それこそずっと家にいたりするわけです。時々出歩いても飲み会もしないし、気の合う友達と誰かのアパートで話し込むというのものもあるかもしれないけど、それもあまりない。

最近の子たちは酒飲まないからって一言で片づけることもできるんですけど、それだけじゃなくて、家にいてオンラインで楽しんでいることがかなり沢山あるような気がします。

そういうことで、まじめな子なんかはこれを機会に新しい勉強に取り組む、まさに新しい学習、資格試験に挑戦してみようとか、大学の勉強以外のこととかです。

大学も実は、オンラインばかりになった時に文科省から通達が来て、学生を遊ばせるな、しっかり学習させなさいという話でした。「資料を見ました」「はい終わり」じゃだめですよ、宿題出さない、そしたらワーストと宿題が出てしまって、当の学生に聞いたら、大変、対面の授業の方がかえって楽だった、オンラインではいっぱい宿題が出て大変です、という話が出るぐらいです。

一方、いい評価をしている学生もいます。私もそうなんですけど資料をいつ見たか、ダウンロードの時間が見えるんですよ。夜中の12時とか真夜中の2時とか、明け方4時に資料を見ている奴がいる。彼らはいったいどういう生活をしているんだろうと思いつつ、とにかく資料をダウンロードしています。

授業になったら授業時間に来なきゃいけない。でもオンラインだったら自分の好きな時間、それこそ夜中12時でもいいわけです。それが好きという人もいます。

だから対応できている人は巣ごもり需要でうまく対応できている、経済活動もそうですが、おそらく文化活動もそこに対応できることをするといいのかなと思います。

その時にあらゆるメディア、それこそ我々オールドな人間は、テレビなんか結構影響を受けます。若い人たちはテレビ、新聞を見ていない人たくさんいるので、そこからプラスで何かお互いにその影響しあう部分をどう見つけ出すかでしょうね。

私はインフルエンサー知りません、大澤さんはどんな人がいるのかとか、知っていますか。私の年代ちょっと難しいですね。私からの回答としては、そんな感じですよ。」

司会「ありがとうございました。それでは続けて大澤さまお願いいたします。」

大澤「はい、ありがとうございます。文化芸術が質の高い生活に必要なだということのように説明すればいいのか、これは難しい。これはほんとに私もそれにずっと向き合っている仕事なんですけれども、今日の場のように、ある一定のラインでそれを分かり合えてる方々の前でしゃべるときは文化芸術とさっさと言うんですけども、そもそも文化芸術という日本語って非常に奇妙な日本語で、これは政府が文化芸術振興基本法を作った時に言葉が生まれた、という経緯があります。

芸術文化という言葉はその前から使われていましたけれども、文化芸術という言葉はその法律を境に生まれたという感じなんです。だから法律用語と思って私はしょうがないって

いう感触なんです。少なくとも、もともと文化という言葉と芸術という言葉は違う意味で日本語としては存在していて、文化っていうのはほんとに広い定義ですね。

僕が良く参照するのは、文化っていうのはもう人間が他者と生きる、共に生きる方法、共生の方法っていうそこまで広げて文化を捉えている定義があります。もちろん芸術、文学、習俗とか、宗教とかも文化に含まれているわけですけども、ある一説にはその共生の方法、共に生きる方法ということがうたわれている定義があって、僕はそれを参照するんですが、文化とはそれぐらい誰かと共に生きる以上、僕は結婚していますけども、カミさんと共に生きる以上、今晚何食べようかっていったときに、僕が食べたいものとカミさんが食べたいものが違う、それで何を食べるか、どうやって料理するか、どんな素材を使って食うか、もうそこから文化ですね、異文化との出会いというぐらい文化というのは間口の広いものです。

なぜ文化が必要かなんてことは問うこと自体が難しく、生きている以上、誰かと共に生きている以上私たちは文化と共に、文化なしに生きられるわけがないというぐらいの広い概念だと僕は思っています。

僕が言うのはいかに多様な文化が必要かっていうことですね。多様である、同じ分り合っている同質の文化だけで集まっちゃうと、もしかしたらそれは何かの変化の時に生き延びられないかもしれないとか、違う文化が出会うから豊かになっていくっていう、そういう意味では生態系のお話をよくするのは、生物の多様性のように森も山も杉だけじゃまずいんですね。いろんな木があって、動物がいることで循環しているという、だから文化もいろんな多様な文化が必要だっていうふうに僕はずっと言い続けています。

これもある程度わかっている人はそれが響くんですけど、意味が分からないって言われると、ほんと食べ物のお話からするしかないないなと思っています。

食べ物は、でも、非常に大事な文化なんです。だから食とか文化という言葉を使う前に僕は食べ物とか、言葉、方言とか文化の中でももう切り離せないものからわかってもらいたいというところをよく考えます。

一方の芸術、これはまた難しいんです。

芸術がなぜ豊かな生活に必要なと言われたときに、これはもしかしたら考え方を、発想を転換しなきゃいけないかもしれないと思っていて、豊かな生活を送っている人にはなんらかの芸術的な経験が、芸術を受け入れたり、作ったりという体験、経験があることが豊かさを支えているんじゃないかと考えます。豊かであるということと、その芸術の体験ということは関りがあるんじゃないか。

これはいろんなアンケートの中でも時々出てくるんですけども、そのこのところを丁寧に読み解くと、あなたにとって芸術は必要ですって押し付けるわけにいかないんですね。

「あなたの生活は豊かですか、日々豊かに生活できていますか、出来ているとしたらそのどこかに芸術的な何か体験みたいなことないですか、それが他の人と共有できたらもっと豊かになりませんかね」という風に言えたらいいなあと思っています。答えになってな

いかもしれないですけども、そのような努力を毎日しております。ありがとうございます。」

司会「ありがとうございました。はい、お願いいたします。」

伊佐「今のちょっと大澤さんの話で触発されたんですが、生物多様性と似ていると言いましたよね。ということは、絶滅危惧種もあるんですよ。もうこの文化芸術、例えば私の久留米地区の「久留米がすり」がありますが、今もう技術保持者がかなり減ってしまって、跡継ぎのいない織元さんもいらっしゃる、お二人だけは跡継ぎ出来てよかったね、という方を知っています。けどまさに絶滅危惧種ですよ。そうすると他のいろんな文化芸術の類でも、もしかしたらもうなくなるかもしれない。ただしその中で、例えばかつて津軽三味線なんかもそうだったですね、しかし今は若手のスターいます。

あるいは、奄美大島の唄者（うたしや）とよばれる民謡を歌う方も一時期もう絶滅危惧種だったんですよ。ところが若い人が一人スターみたいに出てきて、公演が大成功したりするとテレビが取り上げてそこからまた取り上げられる、公演やると儲かるというのであちこち呼ばれて全国各地、果ては海外まで公演にいったりして、絶滅危惧種だったのが弟子入りが増えてきたりしていますね。だから何かブレイクするときがあるんですが、私が思うのは、そういう民間の公演活動というか、プロモーターがいて、やる人、クリエイティブな人は沢山いるけれど、それをプロデュースする人がいないということを言っている人がいるんですね。そういうプロデュースする人を、人材を育成しなければいけないという論者がいる一方で、もう一つ思うのは絶滅危惧種、じゃあ生物はどうしているかということ、行政が保護してますよね。そして勝手につぶれないように、絶滅しないようにいろいろ保護をやっている。そういう意味でいうと文化活動を保護する何か、先ほど資料館の館長さんがおっしゃっていましたが「行政はそういうボランティア活動をバックアップする」と、そういう形で行政のバックアップだとか、様々な支援策をもっと充実しないとそれこそ絶滅危惧的なほんとに危ないなという感じがします。

要するに、民間活動で儲かるところはいいんですけども、そうじゃないところはやっぱり何らかの支援策が求められるところもあるので、その辺をやるような政策、細かい政策っていうのは必要だろうと考えます。

そうすると、もしかしたらですね、皆さん方にはそのお集りの中でどういう行政支援が必要なのかとか、足りないよ、というような声が届いてない所にどういう支援があったらいいのか、おっしゃたのはフリーランスの方がホントに苦しいんだという話とかですね、やっぱり政策的支援がどうしても必要だろうと思いますが、いかがですかね。」

司会「はい、ありがとうございました。よろしいですか、ありがとうございました。みなさまフリートキングの時間ですけども、時間の関係でここで締めさせていただきます。